

## TOPICS 今号のトピックス

- 「NNNドキュメント 3・11大震災シリーズ」の上映会&公開セミナーを実施
- 「仮面ライダー 40年の軌跡 展」大盛況! 平成23年度の年間来館者10万人突破!
- 4月1日から公益財団法人に移行 平成24年度事業計画と予算が決定

## 『NNNドキュメント 3・11大震災シリーズ』の上映会&公開セミナーを実施

昨年の東日本大震災から一年を迎えた3月、日本テレビとNNN系列各社の協力を受けて、『NNNドキュメント』の「3・11大震災シリーズ」をテーマに、番組上映会(3/9～27日・情報サロン)と、公開セミナー「制作者に聞く!～番組制作の現場から～」(3月20日・情文ホール)を実施した。

『NNNドキュメント』は震災発生後の3月20日放送分から「3・11大震災シリーズ」を立上げ、この一年間に30本を制作・放送、この内25本を16日間にわたって上映した。延べ900人を超える参加者があり、視聴後の感想には「3・11後の被災地の生活記録はとても大切な一面であり見応えがあった」「改めて津波の恐ろしさを身にしみて感じ、涙が止まらなかった」などの声が寄せられた。



公開セミナーは、同シリーズの番組制作に携わった被災地3県の報道制作局記者と日本テレビの番組プロデューサーが登壇し、被災者に寄り添い、その姿を伝えることの大切さと難しさ、被災地の現実、福島原発事故の影響など、一年間にわたる取材活動の思いを語った。

〔登壇者〕千野克彦(日本テレビ) 菊池健(テレビ岩手)

佐々木博正(宮城テレビ放送) 岳野高弘(福島中央テレビ)

〔司会〕石井 彰(放送作家)

〔上映番組〕※①はミヤギテレビ部分の上映、②③は全編上映

- ①『シリーズ 3 それでも生きる～大震災…終わらない日々』  
'11年4/24 テレビ岩手・ミヤギテレビ・福島中央テレビ・日本テレビ
- ②『シリーズ 10 津波でんでんこ～三陸・奥尻からの教訓』  
'11年7/24 札幌テレビ・テレビ岩手
- ③『シリーズ 11 原発が壊した牛の村～飯館へいつか還る日まで』  
'11年7/31 福島中央テレビ

**石井** 私はラジオやテレビのドキュメンタリーの構成を担当しており、被災1か月後に岩手県の大堤防で有名な宮古市の田老地区などを中心に回り、今年2月末から3月11日まで青森、岩手、宮城、福島を取材してきた。今日は若い制作者たちが大震災に遭遇し何を感じ、何を考え、どのように番組として放送を続け



できたのか、視聴者がどういう形でテレビを見て、震災に心を寄せ、被災者の声を受け止めていくのかなどを議論したい。登壇者が担当した3作品を見て頂く前に、「こういう所を見てほしい」「こんな思いで作った」ということをお話し下さい。

**佐々木** 私は宮城県名取市で、津波によって奥様と生まれただばかりのお子様を亡くされた名取市役所に勤務する男性を取材しました。非常に悲しい現実を突きつけられ、懸命に生きておられる姿が印象的で、その悲しみは今も続いている中で懸命に生きていく姿を伝えられればと思い制作しました。

**千野** 震災後1か月経ったところで、各局が被災者に寄り添いながら撮ってきた方々の取材をまとめ、今回の震災で被災地の中で生きている人々がどういう思いでいるのかを浮かび上がらせたかった。岩手ブロックは菊池さん、福島の飯館村での最初の取材は岳野さんで、「大震災シリーズ」の継続取材に発展し、初動となった作品が『それでも生きる』です。

**菊池** 「津波が発生して水平方向に遠くに逃げた方より、高台に逃げたの方が生き残っている確率が高いのではないか」と思いながら、震災約2週間後にカメラマンと初めて被災地に入りました。今回の津波では防潮堤も壊されハード面の限界が露わになった。北海道の奥尻と三陸のケースから教訓を学ぶ番組にしたいと制作しました。

**岳野** 当時の福島は放射能問題で混乱状態でしたが、私が取材に入ったのが飯館村でした。そこで出会ったある畜産農家が、牛を手放さなくてはならない苦悩や後継者の息子さんをどうするか現状を広く伝えたいと思い取材しました。

### 取材者も悩みながら被災者に寄り添った

**石井** ミヤギテレビの佐々木さんは、奥様と8か月のお子さんを亡くした名取市役所職員の方とどういう形で出会い、なぜ彼を取材しようと思ったのか。これは助かったケースではないので大変辛い取材で悩んだと思いますが、その辺をお話し下さい。

**佐々木** 3月14日頃の小さい新聞記事に『妻子を亡くされても仕事をなさっている名取市の職員の方がいる』という記事が出て、番組でも紹介した市役所の正面に被災者の方を励ますメッセージを彼が貼り出した。このメッセージを書いた方はどういふ方なのか、新聞には下を向いて悲しそうな写真が出ていたので、「なぜ被災者の方を励ますメッセージを書いたのか」を知りたいということがきっかけでした。ご本人に「取材をしたい」



という希望を話し、彼から「こういう悲しい思いをした人がたくさんいて、自分が書いたメッセージで勇気づけられる人がいれば望ましい」と取材が了解された。当時は奥様がまだ行方不明の状態、彼が「仕事をしている時はそれに打ち込める。そういう時間は家族のことを考えなくても過ごせるが、家に帰ると今までいた2人がいない。思い出の品も全部残っていて毎日泣いてばかりです」という話も聞いた。ご家族の話を書くのは正直辛く、彼自身が「伝えてください」という思いがあったので、辛い事も聞けましたし話して頂いた。

### “てんでんこの教え”と日頃の防災教育が役立った

**石井** “釜石の奇跡”と、一方で“大川小学校の悲劇”と対比されがちなケースですが、菊池さんは、あのビデオから大震災の教訓をどの様に伝えていこうと考えたのですか。

**菊池** 三陸は古くから津波常襲地帯で地震と津波は切っても切れない関係でした。例えば「漫画甲子園」や「俳句甲子園」がありますが、釜石東中学は「防災甲子園」で2年連続入賞の実績があり、学校や地域をあげて防災教育が盛んでした。取材で“てんでんこの教え”のビデオがあることを知りました。VTRで紹介した以外にも“夜寝る時に翌日着る服を枕元に用意なさい”“てんでんばらばらに逃げた後に家族や知人と落ち合う場所を決めておきなさい”などの教えもありました。それらを視聴者にもう一度見直してほしいと考えた番組です。

**石井** 最初に第1避難所から第2避難所に逃げて、更に高台へ逃げているのですが、有力なリーダーがいたわけではないのに皆が助かった。その原因はどこにあったとお考えですか。

**菊池** 生徒主導で自発的に誰が指示することなく自分たちで転々と逃げたという。普段から防災教育に熱心に取り組んでいたこと、大人だと家にお財布を取りに行きたいなどの油断があるが、子供たちの純真な部分が今回の奇跡につながったのではないかと。

**石井** 気象庁は、最初の津波警報は「3メートル以上」と出した。3メートルという方が頭に残って、「以上」が消えてしまう。この問題に良くぞ突っ込まれたなと思います。

**菊池** 千野さんから新聞記事のヒントを頂き、岩手でも最初は3メートル以上と言っていたので、気象庁に問い合わせをしたところ、彼らも勉強会を開いて津波予測の改善に乗り出していた。北海道南西沖地震との関連で番組の柱になると思い取材に入った。情報がどのように流れて、どのように受け止められたかということを整理して取材した。被災した方から「3メートルと聞いたから逃げなかった」という声をたくさん聞いた。津波情報もラジオは聞いたかも知れないが、停電で『テレビは見られなかったし、防災無線も聞こえなかった。まったく情報が入らなかった』という人もいました。

**石井** 皆さんが大変な思いをされている。「悲しい、だけど生きてほしい」「生きてください」「生き延びてほしい」という

メッセージがタイトルに込められていた。震災1か月後に『それでも生きる』を制作したきっかけと、何を伝えようとしたのかをお話し下さい。

**千野** 被災地で起こっている広範囲の出来事をニュースでなく、事実を積み重ねて見えてくるものは何なのかを全国の人にメッセージとして伝えたいということ、『NNNDキュメント』枠でできないかと思った。菊池さん、佐々木さん、岳野さんも日々のニュースではなく、被災者の方々に寄り添い始めていた時期で、取材したものをまとめることによって見えてくるものは何か。「なぜ自分は生き残ったのか」「なぜ妻と子どもは死ななければならなかったのか」「自分に何ができるのか」などでした。この時代に生きている者として明日は見えないけれど、明日の朝までは何とか頑張ろうかと言う。“頑張ろう”ではなく、“生きるということ”だと思い、『それでも生きる』という、それぞれのメッセージを感じて頂きたいと番組タイトルに付け、4月下旬にまとめました。

### 福島原発事故がもたらしたもの

**石井** 岳野さんには「飯館村の牛農家をどういう形で探して、なぜあの一家を取材されたのか」と「この取材の場合は、なぜ複数のカメラマンが必要だったのか」をお聞きしたい。

**岳野** 飯館村は福島原発から30キロ圏内の屋内退避エリアでした。取材していると軽トラックが近づいて来て「何をやっているんだ」と言われた。後から聞くとそこは屋内退避エリアでも人も少なく泥棒だと思われたんです。その男性が「うちの親父が牛を飼っていて、消防団なのでこの辺のことに詳しい」ということで、牛農家がどうなっているのかを知りたいと思い取材に入った。カメラマンの件は、飯館村に私が入った時は20マイクロシーベルトで、一人のカメラマンが集中して取材に行くとその人の線量が上がってしまう。それを分散させるために何人かのカメラマンが協力しながら撮影しました。私も局内のポケット線量計で測り始めたのが18日以降で、当時どれ位被曝したのかを知っている福島県人は誰もいないはずですよ。

**石井** 私たちは「原発では事故がない」と本当に思い込んでいた。3・11以前と以後で原発に対して何が変わりましたか。

**千野** 『NNNDキュメント』では、原発関連は新潟、福井、青森で、住民の思いと行政の立場というテーマで各局が作ってきた。福島中央テレビでも、福島第1原発のお膝元の双葉町の問題を取り上げ、その歴史と住民の思いの中で番組を作った。問題提起はしてきたが、原発のエネルギー行政がどうかという議論を深くしていなかったのではないかと思います。それが3月11・12日以降、福島中央テレビや全国のNNN各局は、福島県の人たちがどう捉えて、これから生きていかなければいけ





ないかという選択を迫られた。今後のことを皆が考え始めてもらう番組作りが大切だと考えている。

**岳野** 原発事故があったということで、うちの局としては原発に対してどういうスタンスで放送するのか、局内で決まっているかどうかは分かりませんが、そういう議論はニュースを放送した後の反省会などで出始めています。

**石井** チェルノブイリ原発事故から考えれば、牛農家の方々は10年で戻るのも難しいかも知れない。もう一方で、行政がこのままでは村が分散するので、町役場だけでも戻そうという焦りが見える。

**岳野** 行政側は早く戻そうという雰囲気だ。飯館村も安全な場所であれば2年で住民を戻すという話が村や議会に出ていますが、「2年で戻れるならいいな」という住民と、「そんなことはありえない」という住民の方など、意見はバラバラです。

### 伝え続けることの難しさ

**菊池** 岩手に行く津波の石碑があったり、「ここより下に家を建てるな」の石碑もあり、これを守って高台移転して助かった集落もあった。日頃の訓練や連絡網などの備えなど意識が高かったはずの三陸でも大きな被害が出た。私たちの責務として伝え続けること、風化させないことをねばり強くやっていかなければと思っています。

**千野** 阪神淡路大震災の時は、テレビが伝えたのは倒壊した家屋、火の手が上がり、高速道路が倒れている状況など、どういう被害だったかを掘り起こす作業だった。今回決定的に違うのは、津波の映像をリアルタイムで記録・放送したこと、一般の方が携帯電話やデジカメなどで記録したことだ。これだけリアルタイムで大震災、大津波を記録したのは、テレビの歴史の中でも初めてのことで、これを1年伝え続け、これからもどのような形でも番組として伝え続けていくことこの重要性を突きつけられたと思います。

**岳野** 放送局なので情報を持っていると思われて、「ここに住んでいいんですか」とよく聞かれるが、「避難した方がいいですよ」とは言えないで答えに窮する状況です。今は取材したものしか放送できない。取材したものをどのように出すのかというベストなものは正直わからないが、わからないものは徹底的に取材するしかないという基本スタンスに戻ろうと考えています。

**佐々木** 宮城では津波の被害が明らかになると、津波の被害の大きい沿岸部の被害にシフトしていった。福島に近い南の亘理町、山元町は津波の被害があったが、あまり行けていない。ここの方から「何で来ないんだ。気仙沼とか石巻ばかりじゃないか」という声もあったが、内陸となると行ってない所も多い。全て同じ様に伝えられないもどかしさはあるが、伝える術を持っていないのかと常に思いつながら取材しています。

### 大震災・原発事故—これからの取り組み

**石井** これだけは伝えたいということ、今後どういふものを作りたいと思っているか、順番にお願いいたします。

**岳野** どの記者も思っていることが「福島を忘れないで下さい」ということ。復興も進んでいない、放射能で悩んでいる家族もたくさんおられる、風評被害で悩んでいる生産者の方もいらっしゃる、この現状を全国に向けて伝えていきたい。

**佐々木** 被災地がどうなっているかを調べることは大変だ。故郷の今の状況、こういう所が足りない、ここは復興してきたと現状を伝え続けたい。先ほどご覧いただいた名取市職員の男性は、「家族を失った悲しみには区切りも終わりもない。1年経ったが2人の命日ということで覚えているということはある、それが特別な日というわけではない」とおっしゃっていた。何か明るい希望を持って歩き出すようなタイミングで、それらの姿を伝えられればと思っています。

**菊池** 今回、「津波でんでんこ」を実践できないで亡くなった方がいるのも現実で、災害弱者と言われる方達の問題を含めて見つめ続けていかなければならないと思う。街作りが思い描いていたよりもスピードが遅いので、経過も含めて見ていきたい。岩手だと北部の方は比較的被害が少なく取材が手薄になっていたのが如何にケアしていくのか。震災は被害が大きくその影響が多岐に及んでいるので、誰か一人が頑張ればということでない。心に傷を負った人と面と向かう辛さもあり難しい取材が強いられているが、被災地の現状を全国に発信して伝えていきたい。

**千野** 今年の3月11日に各局の特番はちゃんと伝えられたのかと疑問を持っていて、東京のキー局の制作者の思いの中に、震災1年目であまりに俯瞰し始めているのではないかという気がしている。東京の論理で作っていく、一言で復興であるとか、悲しみを抱えて生きている人たちがいます、絆で頑張る、など簡単に使っていないか。被災地でさえ温度差があり、被災地以外での温度差自体も感じている。テレビが震災を今後どう伝えていくのかという覚悟を制作者が本当に持っているのか。『NNNDキュメント』は、この一年間、各局が震災に向き合おうと作ってきて、その覚悟を今後も持ち続けて作っていききたいと思っています。

### \*日本テレビ・谷原チーフ・プロデューサーの会場での話\*

今回の大震災は、全国の仲間が力を合わせなければならぬ大きな問題だということで、『NNNDキュメント』の「3・11大震災シリーズ」は、NNN系列局の共同制作を取り入れました。皆が知恵を出すことによって分かりやすくなるものもあります。去年の年末のシリーズ25『聖なる夜と放射線〜この子の未来を祈る』は、放射能の問題を抱えた福島の親がどんな判断をするかということを集めたもので、地元局の福島中央テレビの他、福井放送は福井に子供だけを避難させた母親の選択を追い、日本テレビはチェルノブイリ原発事故に直面したドイツを訪れる母親を取材するなど複数のケースを示しました。全国の系列放送局の仲間から情報やヒントをもらうこともできるのが共同制作の強さであり、また、共同制作でもしないと表わせないのが、東日本大震災の大きさなのかと思っています。

## ■「仮面ライダー 40年の軌跡展」大盛況！ 平成23年度の年間来館者10万人突破！



仮面ライダー放送40周年を記念し「仮面ライダー 40年の軌跡展」を開催(12/9～2/12)。会場は、仮面ライダー好きの男児とそこご両親、昭和ライダー世代の30～40代男性、平成ライダーファンの女子高生など、連日多くの来場者で賑わい、51日間で34,268名が来館した。来場者からは「大人も子供も楽しめる内容で良かった」「大変見応えがあった」「放送ライブラリーならではの内容で、映像上映が豊富で良かった」など、多くの感想が寄せられた。続く2月24日からは、「映像と写真で旅する世界遺産展(自然遺産編)」を開催。著名写真家の写真の展示と共に、世界遺産関連番組の上映会を実施した(2/24～4/8)。

平成23年度の放送ライブラリーの年間来館者数は、昨年とは震災などの影響で届かなかった10万人を達成、104,307名を記録した。

1～3月には、様々な公開セミナーを開催した。毎年恒例のCM関連セミナー「カンヌライオンズ国際クリエイティビティフェスティバル入賞作品上映会」(1/28)、「ACC CMフェスティバル入賞作品上映会」(3/17)を実施。それぞれのコンクールで審査員を務めた講師から、選考の様子や受賞作の傾向など興味深い解説があった。

1～3月には、様々な公開セミナーを開催した。毎年恒例のCM関連セミナー「カンヌライオンズ国際クリエイティビティフェスティバル入賞作品上映会」(1/28)、「ACC CMフェスティバル入賞作品上映会」(3/17)を実施。それぞれのコンクールで審査員を務めた講師から、選考の様子や受賞作の傾向など興味深い解説があった。

2月21日には、第31回名作の舞台裏「黄金の日」を催し、松本幸四郎(出演)、竹下景子(出演)、近藤晋(制作)、高橋康夫(演出)の4氏が登壇した。NHK大河ドラマ16作目にして、海外ロケや商人の視点から見たストーリーなど、多くの「大河初」が試みられた意欲作で、昨年亡くなった市川森一氏の初の大河作品でもある。登壇者たちは「市川氏の脚本は、テーマは無機質な経済でも、しっかりと人間が描かれており、台詞も詩情に溢れていた」と34年前のドラマを懐かしんだ。

3月24日、第9回人気番組メモリー「ザ・ベストテン」を実施。生島ヒロシ(追っかけマン・司会)、山田修爾(制作)、遠藤環(演出)の3氏が、吉川美代子アナウンサーの司会で番組を回顧した。1978年より12年間、TBS系列で放送された伝説の音楽番組。ランキング方式での歌手の生出演、移動先まで追いかけての生中継、大掛かりなスタジオセットなど、斬新な演出で話題を呼んだ。「歌詞や曲の世界観を元に毎週産みの苦しみでセットや演出を考え抜いた。作り手側の強いイメージを真摯に説明することで歌手からもアイデアをもらった。誰もが時間と知恵を惜しみなく注ぎ込んだ番組だった」と山田氏が回想した。分刻みの生中継やスタジオセットなどの懐かしい映像を交えながら、登壇者も会場も笑い声の絶えないセミナーとなった。

3月31日、「春休み親子出前授業@テレ朝」を実施。これは、小学4年から中学2年までと保護者向けに、テレビ朝日の現役のテレビマンから「ニュースができるまで」について話を聞くというもので、春休み期間中に親子向けでは初めての試みとなった。元アナウンサーで現在は報道局ニュースセンター経済部の松井康真記者が、担当している福島原発取材の裏側について語った。松井記者は、原発の大きさを視聴者により良く理解してもらうために、自ら作った原発の模型を持参し紹介した。また、放送では数十秒しか流れないインタビューの裏で多くの苦労や努力をしていることなどをVTRを交えながら語った。後半は、ニュース原稿を読んだり、アナウンサーやカメラマン、音声、フロアディレクターなどニュース作りの様々な役割を体験した。当日は、テレビ朝日のキャラクター“ゴーちゃん。”も登場、会場を盛り上げた。



## ■4月1日から公益財団法人に移行 平成24年度事業計画と予算が決定

昨年10月に申請した公益財団法人への移行認定申請は、本年3月、放送番組センターが公益認定基準に適合するとの答申書が公益認定等委員会から内閣総理大臣に出された。これに基づき、当センターに認定書が交付され、4月1日付で公益財団法人放送番組センターの設立登記がなされた。これにより同日から公益財団法人に移行して事業を開始した。

本年3月14日開催の第4回番組保存委員会は、平成23年度保存対象番組の選定を審議し、テレビ番組は21年度放送分のNHK・民放133社の1,273本、ラジオ番組は22・23年度放送分の各賞受賞・参加番組を中心にNHK・民放91社の331本が選定された。またBL・クリエイター支援サービスの運用について、番組にクレジットを挿入するセキュリティ対応策等が完了したことが報告された。

同日開催された第4回事業運営委員会では、平成24年度事業計画及び収支予算を原案通り理事会に諮ることが了された。

3月16日開催の第4回理事会では、両委員会の報告が了承された。また平成24年度事業計画及び収支予算が承認され、決定した。1月の理事会で設置が了承された「事業検討委員会」を事業運営委員会委員で構成することなどが承認された。24年度事業計画では、公益財団法人に移行した最初の年度であり、不特定多数の利益の増進を基本理念として、着実な事業の実施に努めることとしている。また番組の保存・公開事業は、一般を対象にするだけでなく、放送関係者による利活用も推進し、放送文化に対する理解促進事業は、公開セミナーなどを神奈川・横浜以外でも実施するとしている。